

坂口安吾

青鬼の禪を洗う女



青鬼の禪を洗う女

匂いって何だろう？

私は近頃人の話をきいていても、言葉を鼻で嗅ぐようになつた。ああ、そんな匂いかと思う。それだけなのだ。つまり頭でききとめて考えるということがなくなつたのだから、匂いというのは、頭がカラツポだということなんだらう。

私は近頃死んだ母が生き返つてきたので恐縮している。私がだんだん母に似てきたのだ。あ、また——私は

母を発見するたびに、すくんでしまう。

私の母は戦争の時に焼けて死んだ。私たちは元々どうせバラバラの人間なんだから、逃げる時だっていつのまにやらバラバラになるのは自然で、私はもう母と一緒にいないということに気がついたときも、はぐれたとも、母はどっちへ逃げたろうとも考えず、ああ、そうかとも思わなかった。つまり、母がいないなという当然さを意識しただけにすぎない。私は元々一人ぽっちだったのだ。

私は上野公園へ逃げて助かったが、二日目だかに人がたくさん死んでるといふ隅田公園へ行ってみたら、母の

死骸にぶつかってしまった。全然焼けていないのだ。腕を曲げて、拳を握って、お乳のところへ二本並べて、体操の形みたいにすくませて、もうダメだというように眉根^ねを寄せて目をとじている。生きてた時より顔色が白くなくて、おかげで善人になりましたというような顔だった。

気の弱いくせに^{おびただ}黝しくチャツカリしていて執念深い女なのだから、焼けて死ぬなら仕方がないけど、窒息なんて、嘘のようで、なんだか気味が悪くて仕方がなかった。あの時から、なんとなく^{だま}騙されているような気がし

ていたので、近頃母を発見するたびに、あの時の薄気味悪さを思いだす。

私が徴用された時の母の慌て方はなかった。男と女が一緒に働くななどというのと、すぐもうお腹がふくらむものだというように母は考えているからである。母は私をオメカケにしたがっていた。それには処女というものが高価な売物になることを信じていたので、母は私を品物のように大事にした。実際、母は私を愛した。私がちよつと食欲がなくなっても大騒ぎで、洋食屋だの鮓屋すしやからおいしそうな食物をとりよせてくる。病気になるオロオロし

て戸惑うほど心痛する。私に美しい着物をきせるために
艱難辛苦かんなんしんくを意とせぬ代り、私の外出がちよつと長過ぎて
も、誰とどこで何をしたか、根掘り葉掘り訊問する。知
らない男からラブレターを投げこまれたりして、私がそ
れを母に見せると、まるで私が現に恋でもしているよう
に血相を変えてしまって、それからようやく落着きを取
りもどして、男の恐しさ、甘言手管かんげんてくだの種々相に就て説明
する。その真剣さといつたらない。

私はしかし母を愛していなかつた。品物として愛され
るのは迷惑千万なものである。人々は私が母に可愛がら

れて幸福だと言うけれども、私は幸福だと思つたことはなかつた。

私の母は見栄坊だから、私の弟が航空兵を志願したとき、内心はとめたくて仕方がないくせに賛成した。知人や近隣に吹聴する方がもつと心になつていたからである。夜更けに私がもう眠つたものだと思つて起き上つて神棚を伏し拜んで、雪夫や、かんにんしておくれなどとさめざめと泣いたりしているくせに、翌日の昼はゴムマリがはずむような勢いでどこかのオバさんたちにせがれ倅の凜々しさを吹聴して、あることないこと喋りまくつてい

るのである。

私は徴用を受けたとき、うんざり悲観したけれども、母が私以上に慌てふためくので、馬鹿馬鹿しくて、母の気持が厭らしくて仕方がなかった。

私は遊ぶことが好きで、貧乏がきらいであった。これだけは母と私は同じ思想であった。母自身がオメカケであるが、旦那の外にも男が二、三人おり、役者だの、何かのお師匠さんなどと遊ぶこともあった。私にすすめてお金持の、気分の鷹揚な、そしてなるべく年寄のオメカケがよかろうという。お前のようなゼイタクな

遊び好きは窮屈な女房などになれないよと言うのだが、
たつて女房になりたけりや、華族の長男か、千万円以上
の財産家の長男の奥方になれと言う。特に長男でなけれ
ばならぬと言うのである。名誉かお金か、どっちか自由
にならなけりや、窮屈な女房づとめの意味がないと言う
のだ。浮草稼業の政治家だの芸術家はいくら有名でもい
つ没落するかも知れないし貧乏で浮気性で高慢で手に負
えないシロモノだと言う。会社員などは軽蔑しきつてお
り、要するに私がお金のない青年と恋をするのが母の最
大の心痛事であり恐怖であった。

私は女学校の四年の時に同級生で大きな問屋の娘の登美子さんに誘われてゴルフをやりはじめた。ちよつと映画を見てきても渋い顔をする母が私の願いを許したのは、ゴルフとは華族とか大金満家とか、特権階級というもの遊びで貧乏人の寄りつけないものだと言ひにきいて知っていたからで、だから高価なゴルフ用具もまったく驚く顔色もなく買ってくれた。

独身の若者には華族であろうと大金満家の御曹子であろうと挨拶されてもソツポを向くこと、話しかけられてもフンとも返事をしないこと、その一日の出来事を報告

して母の指示を仰ぐこと、細々と訓示を受けたが、実は御年配の大金満家が大華族に見染められればいいという魂胆で、女学生だけ二人づれでゴルフに行くなんて破天荒の異常事だということなどは気がつかないのだ。ガツチリ屋のくせに無智そのものの世間知らずであった。

あいにくなことに御年配の華族や大金満家には御近づきの光栄を得ず、三木昇という映画俳優と友達になった。美貌を鼻にかけるだけが能で、美貌が身上だと思っており、芸術についての心構えが根底に失われている。ギターが自慢で、不遇なギター弾きの深刻な悲恋か何か演じ

れば巧技忽ち一世を風靡ふうびして時代の寵児となるのだけれども、それが分りすぎるから同僚の妬みに妨げられて実現できないのだと言う。ギターをきかせるから遊びにこいとしつこく言うので二人そろって行ってみたが、話の外の素人芸で、当人だけが聴きほれて勝手なところで引っぱったり延ばしたりふるわせたり、センスが全然ないばかりか、悪趣味のオマケがあるだけだった。

三木は私を口説くどいたが拒絶したので、登美子さんを口説いてこれも拒絶された。私は黙っていたので、登美子さんは自分だけだと思って自慢顔に打開けたが、私は三

木の薄ツペラなのが阿呆らしくなっていた折だから、その後は交際はやめてしまった。まもなくゴルフの出来なような時世になって、やがて女学校を卒業したが、登美子さんは拒絶しながら、然し内々得意になってその後、交際をつづけていた。そして私が登美子さんに誘われ、ても、もう三木と遊ばなくなったのを、嫉妬のせいだとうぬぼれていたが、私も三木に口説かれたことがあったわ、たぶんあなたよりも先に、と言ってもそれも嫉妬のせいだと思い、三木に訊いたけどそんなこと大嘘だと言ったわよと言って、鼻をひくひくさせていた。それ以来

は一そう得意で、三木の実演だ、研究会だ、というよう
な切符を昔は十枚三十枚ぐらい買ってやっていたのを、
百枚二百枚三百枚、五百枚ぐらい買うようになった。パ
トロン又気取りで、時計や洋服を買ってやったり、指環
を交換しあったり、お金もやったりしていたようだが、
温泉だの待合へ泊るようになり、然し処女はまもってい
るのだと得意であった。そういう時には私に連絡して私
の家へ泊ったように手配しておく。それを私達はアリバ
イとよんでいたが、私も然し登美子さんに私のアリバイ
をたのむことにしていた。

私は登美子さんにアリバイをたのんだけれども、誰とどこで何をしたということは一切語らなかつた。登美子さんは根掘り葉掘り訊問する癖があつたが、私は、なんでもないのよ、とか、別にいいことじゃないのよ、などと取りあわないから、性本来陰険そのものだとか、秘密癖で腹黒いとか、あなたは純情なんて何もなくてただ浮気っぽいから公明正大に人前に言つたり振舞つたりできないのでしよう、ときめつける。

私は然しそんなことは人には何も言いたくないのだ。つまらないのだ、恋愛なんて。ただそれだけ。

登美子さんは女学校を卒業すると、かねてあこがれの職業婦人で、事務員になったが、堅苦しくて窮屈なので、百貨店の売子になった。私は別に働きたくはなかったけれど、母と一緒に家にいるのが厭なので、勤めに出たくて仕方がなかった。然し許すどころの段ではなく、そんなことを言いだすと、そろそろ虫がつきだしたとまず監視嚴重に閉じこめられるばかり、そのうえ母は焦って、さる土木建築の親分のオメカケにしようとした。この親分は一方ではさる歓楽地帯を縄張りにした親分でもあり、斬ったはったの世界では名の知れた大親分だと

いうことだが、もう隠居前で六十を一つか二つ越して
いた。

私は賑やかなことが好きな夕子だから、喧嘩の見物も
嫌いではなかったけれども、根が至って気のきかない、
スローモーション、全然モーローたる立居振舞トンマそ
のものの性質で、敏活また歯ぎれのよい仁義の世界では
全然モーションが合わないのだもの、話にならない。私
は別にオメカケが厭だとは思っていなかったが、自由を
束縛されることが厭なので、豊かな生活をさせてくれて
一定の義務以外には好き放題にさせてくれるなら、八十

のオジイサンのオメカケだって厭だとは言わない。親分の名を汚したの何だのと短刀をつきつけられ小指をつめたり、ドスで忠誠を誓わされ自由を束縛されては堪えられない。

私は母に厭だといったが、もう母親が承諾した以上、今更厭だと言えば、命が危い。お前は母を殺していいのかいと言って脅迫する。仕方がないから、母には内密に、私から断わることにして、近所の洗濯屋の娘で、薄馬鹿だけれども伝言の口上だけはひどく思いつめて間違いないハッキリ言ってくるという、潔癖のすぎたあげくの気

違いのような娘がいて、私に変に親しみをこめて挨拶するような仲だから、この娘に伝言をたのんだ。私より三ツ年上のそのとき二十二であつた。この娘が私にいわれた通り、無理に親分に会わせてもらつて、口上を間違ひなく述べたから、親分は笑つて、そうかい、よしよし、お駄賃をくれて歸して、その日のうちに相当の乾兎を使者に破約を告げて、お嬢さんへ親分からの志と云つて、まるで結納のように飾りたてた高価な進物をくれた。

そうこうするうちオメカケなぞは国賊のような時世となつて、まっさきに徴用されそうな形勢だから、母は慌

ててやむなくオメカケの口はあきらめ、徴用逃れに女房の口を、と言いだしたけれども、たかがオメカケの娘だもの、華族様だの千万長者の三太夫の倅だって貰いに來てくれるものですか。そこへ徴用が來たのだから、母は血相を変えた。そしてその晩、夕食の時にはオロオロ泣きだしてしまったものだ。

世間の娘が概してそうなのか私は人のことは知らないけれども、私や私のお友達は戦争なんか大して関心をもっていないかった。男の人は、大学生ぐらいのチンピラ共まで、まるで自分が世界を動かす心棒でもあるような

途方もないウヌボレに憑かれているから、戦争だ、敗戦だ、民主主義だ、悲憤慷慨、熱狂協力、ケンケンガクガク、力みかえって大変な騒ぎだけれども、私たちは世界のことは人が動かしてくれるものだときめているから勝手にまかせて、世相の移り変りには風馬耳ふうまじ、その時々愉しみを見つけて滑りこむ。日頃オサンドンの訓練、良妻賢母、小笠原流、窮屈の極点に痛めつけられているから単純な遊びでも御満悦で、戦争の真最中でも困らない。国賊などと呼ばれても平チャラで日劇かなんかグルリと取りまいて三時間五時間立ちン坊をして、ひどく退屈だ

けれども、退屈でも面白いのである。私は退屈というものは案外ほんとに面白いんじゃないかと思っっている。だって外に、ほんとに面白いという何かがあるのだろうか。

ところが女房となると全然別種の人間で、これぐらい愚痴ツボくて我利我利人種はないのである。職業軍人の奥方を除いたら、女房と名のつく女で戦争の好きな女は一人もいない。恨み骨髄に徹して軍部を憎み政府を呪っているのも、自分の亭主が戦争にかりたてられたり徴用されたり、それだけの理由で、だから私にはわけが分らない。私は亭主なんてムダで高慢なウルサガタが戦争に

かりだされて行ってしまえば、さぞ清々するだろうに、と思われるのに。

生活的に男に従属するなんて、そして、たった一人の男が戦争にとられただけで、世界の全部がなくなるようになるなんて、なんということだろう。私には、そんな惨めなことは堪えられない。

私の母は、これはオメカケで、女房ではないのだけれども、これ又途方もなく戦争を憎み呪っていた。然しさすがにオメカケらしく一向に筋が通らずトンチンカンに恨み骨髓に徹していて、タバコが吸えなかったり、お魚

がたべられなくなったり、そんなことでも腹を立てていたが、何と云ってもオメカケが国賊となり、私の売れ口がなくなっただのが、口惜しさ憎さの本尊だった。

「ああ、ああ、なんとという世の中だろうね」と母は溜息をもらしたものだ。

「早く日本が負けてくれないかね。こんな貧乏たらしい国は、私はもうたくさんだよ。あちらの兵隊は二日で飛行場をつくるんだってね。チーズに牛肉にコーヒーにチョコレートにアップルパイにウイスキーかなんかがないと戦争ができないてんだから、大したものじゃないか。」

日本なんか、おまえ、亡びて、一日も早くあちらの領分になつてくれないかね。そのとき私が残念なのは日本の女が洋服を着たがることだけだよ。着物をきちやいけないななんてオフレが出たら、私やいったい、どうすりやいんだい。おまえは洋装が似合うからいいけれど、ほんとに、おまえ、そのときはシツカリしておくれよ」

要するに私の母は戦争なかばに手ツ取りばやく日本の滅亡を祈ったあげく、すでに早くも私をあちらのオメカケにしようともくろんだ始末で、そのくせ時ならぬ深夜に起き上って端坐して、雪夫や許しておくれ、などと泣

きだしてしまおう。雪夫や、シツカリ、がんばれ負けるな
と言うかと思うと、じれったいね、おまえ飛行機乗りは
見張りがついてるわけじゃないんだから、敵陣へ着陸し
て、降参して、助けて貰えばいいじゃないか。どうせ日
本は亡びるんだよ。ほんとにまア、トンマな子だったら
ありやしない。

母は私の妹を溺愛のあまり殺していた。盲腸炎で入院
して手術の後、二十四時間絶対に水を飲ましてはいけな
いというのに、私と看護婦のいないとき幾度か水を飲ま
せたあげく腹膜炎を起させ殺してしまった。そのせいでは

ないけれども、私は母に愛されるたび、殺されるような寒気を覚えるばかり、嬉しいと思ったこともないのである。無智なのだ。私は貧乏と無智は嫌いであった。

私はそのころまったく母の気付かぬうちに六人の男にからだを許していた。その男たちの姓名や年齢、どこでどうして知りあったか、そんなことは私は言いたくもないし、全然問題にしてもいないのだ。ただ好きであればいい、どここの誰でも、一目見た男でも、私がそれを思い出さねばならぬ必要があるなら、私は思いだす代りに、別な男に逢うだけだ。私は過去よりも未来、いや、現実

があるだけなのだ。

それらの男の多くは以前から屢々私に言い寄っていたが、私は彼等に召集令がきて愈々出征するという前夜とか二三日前、そういう時だけ許した。後日、娘たちの間に、出征の前夜に契って征途をはげます流行があるときに、出征の前夜に契って征途をはげます流行があるときに、いたが、私のはそんな凜々しいものではなかった。私はただクサレ縁とか俺の女だなどとウヌボレられて後々までうるさく付きまとわれるのが厭だからで、六人の外に、病弱の美青年が二人、この二人にも許していいと思っていたが、召集解除ですぐ帰されそうな惧れがあったので、

許さなかった。果して一人は三日目に戻ってきたが、一人は病院へ入院したまま終戦を迎えた。

登美子さんは不感症だそうだ。そのせいか、美男子を見ると、顫えが全身を走ったり、堅くなったり、胸がしめつけられたり、拳をにぎったり、圧迫されるそうだけれども、私はそんなことはない。

私は不感症の反対で、とても快感を感じる。けれども私はその快感がたつて必要な快感だとも思わないので、そういう意味で男の必要を感じたことは一度もなかった。ちよつと感じて、すぐまぎれて、忘れてしまうこ

とができる。だから私は六人の男に許したときも、自分が浮気だとは思わずに、電車の中だの路上だのので、思わ^{あか}ず赧くなったり胴ぶるいがするという登美子さんが、よっぽど浮気なのだと思っている。私はあんなことは平凡で適度なのが好きだ。中には色々変な術を弄して夢中にさせる男もいるけれども、あとで思いだすと不愉快で、ほんとに弄^{もてあそ}ばれたとか辱しめられたという気持になるから、あんな時にあんな風に女を弄ぶ男は嫌いだ。あんなことは平凡で、常識的で、適度でなければならぬものだ。

私は終戦後三木昇に路上であってお茶をのんだが、そのとき思いついたように私を口説いて、技巧がうまくてそのうえ精力絶倫で二日二晩窓もあけず枕もとのトーストやリンゴを嚙りながら遊びつづけることもできるのだから、どんな浮気な女でも夢中になったり、感謝したりするなどと言った。私は夢中になるのは好きじゃないと答えたが、彼は女のとれかくしだと思つて、ネ、いいだろう、路上で私の肩を抱いたが、抱かれた私は抱かれたまま百米ほど歩いたけれども、私はそんな時は食べもののことかなんか考えていて、抱いている男のことなどは

考えていない。

私は男に肩を抱かれたり、手を握られたりしても、別にふりほどこうともしないのだ。面倒なのだ。それぐらいのこと、そんなことをしてみたいなら、勝手にしてみるがいいじゃないか。するとすぐ男の方はうぬぼれて私にその気があると思つて接吻しようとしたりするから、私は顔をそむける。然し、接吻ぐらいさせてやることは何度もあつた。顔をそむける方が面倒くさくなるから。すると忽ちからだを要求してくるけれども、うん、いつかね、と答えて、私はもうそんな男のことは忘れてしま

う。

私の徴用された会社では、私が全然スローモーションで国民学校五年生ぐらいの作業能力しかないので驚いた様子であった。私はすぐ事務の方へ廻されたが、ここでも問題にならなかつた。

けれども別に怠けているわけでもなく、さりとして特別につとめるなどということは好きな男の人にもしてあげたことのない性分なのだから、私はヒケメにも思わなかつたし、人々も概して寛大であつた。

会社は本社の事務と工場の一部を残して分散疎開することになり、私の部長は工場長の一人となって疎開に当り、私にうるさく疎開をすすめた。

私は何より嫌いなのは病気になることと、そして、それ以上に、死ぬことであつた。戦争が本土ではじまることになったら山奥へ逃げこんでも助かるつもりでいたが、まだ空襲の始まらぬ時だったので、遊び場のない田舎へ落ちのびる気持にもならなかつた。

私は平社員、課長、部長、重役、立身出世の順序通りに順を追うて口説かれたが、私は重役にだけ好感がもて

た。若い男達が口説くというよりただもうむやみから
だを求めゐるのを嫌うわけではなく、私自身は肉慾的な要
求などはあんまりないのだけれども、私は男女が愛し合
うのは当然だと思つており、その世界を全面的に認めて
いるから、たとえば三木昇が好色で肉情以外に何もなく
とも、そのことで軽蔑はしなかつた。できないのだ。文
化というのだから、教養というのだから、なんだか私にもよ
く分らぬけれども精神的に何かが低いから厭になつただ
けであつた。

母の旦那は大きな商店の主人であつたが、山の別荘へ

疎開した。その隣村の農家だかに部屋があるからという知らせがきて、母は疎開したがったが、私が徴用で動けないので、大いに煩悶していたが、空襲がはじまり、神田がやられ、有楽町がやられ、下谷がやられ、近いところにもポツポツ被害があったりして、母も観念して单身荷物と共に逃げだした。母も亦私同様病氣と死ぬことが何よりの嫌いで、雪夫は医者に育てるのだと小さい時からきめていたのは、少しでも長生きしたいという計算からであった。

母は一週間に一度ずつ私を見廻りに降りてきた。けれ

ども実際は若い男と密会のためで、これだけは私に隠しておきたかったのだけれども、交通も通信も不自由で、打合せがグレハマになるから、仕上げは御見事というわけにも行かず男を家へひきいれて酒をのみ泊めてやることもあった。

私は母だから特別の生き方を要求するような気持は微塵もなく、私が自由でありたいように、母も私に気兼ねなどしない方がサツパリして気持がいいと思っていたが、私は然し母が酔っ払うとダラシなくなるのと、男が安ッポすぎたのでなさけなかった。

三月十日の陸軍記念日には大空襲があるから三月九日には山へ帰るのだと母は言っていた。そのくせ男との連絡がグレハマにいったので、九日の夜にはいつてようやく男に会えて家へつれてきて酒をのんでいた。この日のために山から持ってきた鶏だの肉だの、薄暗がりで料理する女中につきあって私も起きており、警戒警報の時母の酒宴はまだ終らず、私のきいているラジオの前へやってきて、ダイヤルの光をたよりにまた酒もりをはじめた。三機ほど房総の方からはいつてきて投弾せず引返し、又しばらくして三機ほど同じコースからはいつて

きて、これも投弾せず引返してしまった。もう引返してしまつたから解除になるだろうなどと言っていると、外の見張所で、敵機投弾、火事だ火事だ、と言う。すると私たちの頭上をごうごうひどい音がした。二階の窓へ物見に行つた女中が大変、もう方々一面に火の手があがつているという。わけが分らずボンヤリしているうちに空襲警報が鳴つたのだ。

モンペもつけず酔つ払っていた母の身仕度に呆れるぐらゐの時間がかかつたけれども、夜襲の被害を見くびることしか知らなかつた私は窓をあけて火の手を見るだけ

の興味も起らず暗闇の部屋にねころんでおり、荷物をま
とめて防空壕へ投げこんで戻るたび、あっちへも落ちた、
こっちにも火の手があがったというけたたましい女中の
声をきき流していた。

そのとき母のさきに身仕度をととのえて私の部屋へき
ていた男が酒くさい顔を押しつけてきて、私が顔をそむ
けると、胸の上へのしかかかってモンペの紐をときはじめ
たので、私はすりぬけて立ちあがった。母がけたたまし
く男の名をよんでいた。私の名も、女中の名もよんだ。
私は黙って外へでた。

グルリと空を見廻したあの時の私の気持というものは、壮観、爽快、感歎、みんな違う。あんなことをされた時には私の頭は綿のつまったマリのように考えごとを喪失するから、私は空襲のことも忘れて、ノソノソ外へでてしまったら、目の前に真ッ赤な幕がある。火の空を走る矢がある。押しかたまって揉み狂い、矢の早さで横に走る火、私は吸いとられてポカンとした。何を考えることもできなかつた。それから首を廻したらどっちを向いても真ッ赤な幕だもの、どっちへ逃げたら助かるのか、私はしかしあのととき、もしこの火の海から無事息災

に脱出できれば、新鮮な世界がひらかれ、あるいはそれに近づくことができるような野獣のような期待に亢奮した。

翌日あまりにも予期を絶した戦争の破壊のあとを眺めたとき、私は住む家も身寄の人も失っていたが、私は然しむしろ希望にもえていた。私は戦争や破壊を愛しはしない。私は私にせまる恐怖は嫌いだ。私はしかし古い何かか亡びて行く、新しい何かか近づいてくる、私はそれが何物であるか明確に知ることにはできなかったが、私にとってには過去よりも不幸ではない何かか近づいてくるの

を感じつつづけていたのだ。

全くサンタンたる景色であつた。焼け残つた国民学校は階上階下階段まで避難民がごろごろして、誰の布団もかまわず平気で持つてきてごろごろ寝ている男達、人の洋服や人のドテラを着ている者、それは私のだといわれ、じゃア借りとくよですんでしまふ。顔にヤケドして顔一面に軟膏ぬって石膏の面みたいな首だけだして寝ている十七八の娘の布団を三枚は多すぎらといつて一枚はいで持つて行って自分の連の女にかけてやる男もある。何かねえのか食べ物は、と人のトランクをガサガサ掻き

まわすのを持主がポカンと見ているていたらくで、あつちに百人死んでる、あの公園に五千人死んでるよ、あそこじゃ三万人も死んでら、命がありや儲け物なんだ、元氣だせ、幽霊みたいな蒼白な顔で一家の者を励ます者、死体の底の泥の中に顔をうずめて助かって這いだしてきたという男はその時は慾がなかったけれどもこうして避難所へ落着いてみると無一物が心細くて、かきわけた死体に時計をつけた腕があつたが、せめてあの時計を頂戴してくればよかったといっている。この男はまだ顔の泥をよく落しておらないけれども、大概似たような汚い顔

の人たちばかり、顔を洗うことなんか誰も考えていない。

私と女中のオソヨさんは水に浸した布団をかぶって逃げだしたが、途中に火がつき、布団をすて、コートに火がついてコートをすて、羽織も同じく、結局二人ながら袷一枚、無一物であったが、オソヨさんの敏腕で布団と毛布をかりてくるまり、これもオソヨさんの活躍で乾パンを三人前、といったって三枚だ、一日にたったそれだけ、あしたはお米を何とかしてあげる、と係りの者が言うので空腹だけでも我慢して、そして私はオソヨさんが、もう東京はイヤだ、富山の田舎へ帰る、でも無一物

で、どうして帰れることやら、などと様々にこぼすのを
ききながら、私は然し、ほんとにそうね、などと返事を
しても、実際は無一物など気にしていなかった。

何も持たない避難民同士のなかから布団と毛布がころ
がりこむし、二三枚の乾パンでは腹がぺこぺこだけれども、
あしたはお米がくると言うから、私は空腹よりも、こう
して坐っていると人が勝手に色々何とかしてくれるのが
面白くて仕方がない。私はちよつとした空腹などより、
人間同士の生活の自然のカラクリの妙がたのしい。窮す
れば通ず、困った時には自然に何とかなるものだ、とい

うのが、私がこれまでに得た人生の原理で、私に母をたよる気持のないのも、私の心の底にこんな瘤こぶみたいな考えがあるせいだろう。私は我まま一ぱいに育てられたけれど、たとえば母も女中も用たしにでて私一人で留守番をしてお料理はお前が好きないようにこしらえておあがりと言われている、私は冷蔵庫のお肉やお魚には手をつけずカンヅメをさがす、カンヅメがなければ御飯にカツブシだけ、その出来あがった御飯がなければ、あり合せのリンゴやカステラの切はしだけでも我慢していられる。ペコペコの空腹でも私はねころんで本を読んでいる

のだ。だから我まま一ぱいなどといつても空腹には馴れており、それも我ままのせいかも知れないけれども、我ままもまた相当に困苦欠乏に堪える精神を養成するもので、満堂数千の難民のなかで私が一番不平を言わないようだった。

私自身がそんな気持だから、人々の不幸が私にはそれはいうまでもなく不幸は不幸に見えるけれども、又、別なものに見えた。私には、たしかに夜明けに見えたのだ。

私はハッキリ母と別な世界に、私だけで坐っている自分を感じつづけていた。私がふと気にかかるのはもう母

に会いたくないということだけで、私はここにこうして
いる、母もどこかにこんな風に行っているだろう、そして
このまま永遠にバラバラでありたいということだけであ
った。

私にとっては私の無一物も私の新生のふりだしの姿で
あるにすぎず、そして人々の無一物は私のふりだしにつ
きあってくれる味方のようなたのもしさにしか思われ
ず、子供は泣き叫び空腹を訴え、大人たちは寒気と不安
に蒼白となり苛々し、病人たちが呻いていても、そして
あらゆる人々が泥にまみれていても、私は不潔さを厭い

もしなければ、不安も恐怖もなく、むしろ、ただ、なつかしかった。私のような娘（私のような娘が何人いるのか私は知らないけれども）ともかく私のような娘にとっては、日本だの祖国だの民族だのという考えは大きすぎて、そんな言葉は空々しいばかりで始末がつかない。新聞やラジオは祖国の危機を叫び、巷ちまたの流言は日本の滅亡を囁いていたが、私は私の生存を信じることができたので、そして私には困った時には自然にどうにかなるものだという心の瘤があるものだから、私は日本なんかどうなっても構わないのだと思っていた。

私には国はないのだ。いつも、ただ現実だけがあつた。眼前の大破壊も、私にとっては国の運命ではなくて、私の現実であつた。私は現実はただ受け入れるだけだ。呪ったり憎んだりせず、呪うべきもの憎むべきものには近寄らなければよいという立前で、けれども、たった一つ、近寄らなければよい主義であしらうわけには行かないものが母であり、家というものであつた。私が意志して生れたわけではないのだから、私は父母を選ぶことができなかつたのだから、然し、人生というものは概してそんなふうに行きあたりバツタリなものなのだろう。好きな

人に会うことも会わないことも偶然なんだし、ただ私には、この一つのもの、絶対という考えがないのだから、だから男の愛情では不安はないが、母の場合がづらいのだ。私は「一番」よいとか、好きだとか、この一つ、ということが好きだ。なんでも五十歩百歩で、五十歩と百歩は大変な違いなんだと私は思う。大変でもないかも知れぬが、ともかく五十歩だけ違う。そして、その違いとか差というものが私にはつまり絶対というものに思われる。私は、だから選ぶだけだ。

オソヨさんが富山へ帰る途中に赤倉があるから、私は

山の別荘へ母の死去を報告に行ってみようか、会社へ顔をだしてみようか、迷っているうち、布団と毛布の持主が立去ることになり、仕方がないから私も山へ行こうと思っっていると、専務が私を探しにきてくれた。どうにかなるということが、こうして実際行われてくるのを知りうるのだが、私を特別勇気づけてくれた。

私は山の別荘へ行くことは好まなかった。母の旦那と私には血のつながりはないのだけれども、やっぱり親の代理みたいに威張られ束縛されるのが不安であったし、私はそれに避難民列車にのって落ちて行くのがなんとも

惨めで堪えがたい思いになっていた。

避難民同士という垣根のない親身の情でわけへだてなく力強いところもあったが、垣根のなさにつけこんで変に甘えたクズレがあり、アヤメも分たぬ夜になると誰が誰やら分らぬ男があっちからこっちから這いこんできて、私はオソヨさんと抱きあって寝ているからオソヨさんが撃退役でシツシツと猫でも追うように追うのがおかしくて堪らないけど、同じ男がくるのだから別の男なのか、入り代り立ち代り眠る間もなく押しよせてくるので、私たちは昼間でないと眠る間がない。

日本人はいつでも笑う。おくやみの時でも笑っている
そうだけれども、してみると私なんか日本人の典型と
いうことになるのか、私は人に話しかけると大概笑
うのである。その代りには、大概返事をしたことがない。
つまり、返事の代りに笑うのだ。なぜと行って、日本人
は返事の気持の起らない月並なことばかり話しかけるの
だもの、今日は結構なお天気でございます、お寒うござ
います、言わなくつても分りきっているのだから、私が
ほんとにそうでございますなんて返事したら却って先
さまを軽蔑、小馬鹿のように扱う気がするから、私は返

事ができなくて、ただニツコリ笑う。私は人間が好きだから、人を軽蔑したり小馬鹿にしたり、そんな気のきいたことはとてもできない。今日は結構なお天気でございます、お寒うございます、私は有るがまま受け入れて決して人を小馬鹿にしない証拠に最も愛嬌よくニツコリ笑う。すると人々は私が色っぽいか助平たらしいとかいうのである。

私は元来無口のたちで、喋らなくてもすむことなら大概喋らず、タバコが欲しい時にはニユウと手を突きだす。タバコちょうだい、取ってちょうだい、そんなことを言

わなくともタバコの方へ手をのばせば分るのだから、黙って手をニユウとだす、するとその掌上へ男の人がタバコをのせてくれるものだときめているわけでもなくて、のせてくれなければタバコのある方へ腰をのばして益々ニユウと手を突きのばして、あげくに、ひっくりかえってしまうこともあるけれども、私は孤独になれていて、人にたよらぬたちでもあり、怠け者だから一人ぼっちの時でも歩いて取りに行かず、腰をのばし手をのばして、あげくに摑んだとたん、ひっくりかえるというやり方であった。けれども男は女に親切にしてくれるものだ

と心得ているから、男の人が掌の上へタバコをのっけてくれても、当り前に心得て、めったに有難うなどとは言ったことがない。

だから私はあべこべに、男の人が私の膝の前のタバコを欲しがっていることが分ると、本能的にとりあげて、黙ってニユウと突きだしてあげる。そういうところは私は本能的に親切で、これはつまり女というものの男に対する本能的な親切なのだろう。その代り、私は概ねウカツでボンヤリしているから、男の人が何を欲しがっているか、大概は気がつかないのである。然し根は親切その

もので、知らない男の人にでもわけへだてなく親切だから、登美子さんは私のことを天下に稀れな助平だという。つまり、たまたま汽車の隣席に乗り合せた知らない男の人がマツチを探しているのを見ると、私は本能的に私のポケットのマツチをつかんで黙ってニユウとつきだしてあげる。私は全く他意はなく、女というものの男に対する本能だもの、これは親切とよぶべきもので、助平などとは意味が違うものなのだ。電車の中で正面に坐っている美青年に顔をほてらせたり、からだが堅くなったり、胸や腰がキュウとしまるといふ登美子さんが、それも本

能だろうから、私は別に助平だとは思わないが、私にくらべて浮気だろうと思うのである。

けれども男の人たちも登美子さんと同じように私の親切を浮気のせいだと心得て、たちまち狎なれて口説いたり這いこんだりする。特別、避難所の国民学校では屈することなくしつきりなしの猛襲にうんざりして、こんな人たちとこんな風に都を落ちて見知らぬ土地へ流れるなんて、私はとても、甘えすぎたクズレが我慢のできない気持でもあった。

だから私は専務を見るとホッと安堵、私はたちまち心

を変えて、別荘への伝言をオソヨさんにたのみ、私は専務にひきとられた。

久須美（専務）は五十六であった。

さして痩せてるわけでもないが、六尺もあるから針金のようにみえる。獅子鼻で、ドングリ眼で、醜男そのものだけれども、私は然し、どういうせいか、それが初めから気にかからなかった。まじりけのない白髪が私にはむしろ可愛く見え、ドングリ眼も獅子鼻も愛嬌があつて私はほんとに嘘や虚勢ではなく可愛く見える。私は少女

の頃から男の年齢が苦にならず、女学生の時も五十をすぎた教頭先生が好きでたまらなかつた。この人も美しい人ではなかつた。

終戦後、久須美は私に家をもたせてくれたが、彼はまったく私を可愛がってくれた。そしてあるとき彼自身私に向つて、君は今後何人の恋人にめぐりあうか知れないが、私ぐらい君を可愛がる男にめぐりあうことはないだろうな、と言つた。

私もまったくそうだと思つた。久須美は老人で醜男だから、私は他日、彼よりも好きな人ができるかも知れな

いけれども、然しどのような恋人も彼ほど私を可愛がる筈はない。

彼が私を可愛がるとは、たとえば私が浮気をすると出刃庖丁かなにか振り廻して千里を遠しとせず復縁をせまうって追いまわすという情熱についてのことではなくて、彼は私が浮気をしても許してくれる人であった。

彼は私の本性を見ぬいて、その本性のすべてを受け入れ、満足させてくれようとする。彼が私に敢て束縛を加えることは、浮気だけはなるべくしてくれ、浮気するならば私には分らぬようにしてくれ、と言うぐらいのこ

とだけであつた。

だいたい私みたいなスローモーションの人間は、とても世間並の時間の速力というものについて行けない。けれども私は人と時間の約束したり一つの義務を負わされると、とても脅迫観念に苦しめられるけれども、どうしてもスローモーションだからダメで、会社へでていたころは二時間三時間、五時間六時間おくれる。終業の三十分前ぐらいに出勤して、今ごろ出てくるなら休みなさいなどと皮肉られても、私だってそんな出勤が無意味と知りながら出てゆくからには、どんなに脅迫観念に苦しめ

られていたか、久須美だけはそれを察して、専務が甘やかすから、などと口うるさくても、彼は私に一言の非難も言わず、常にむしろいたわってくれた。

私は好きな人と、たとえば久須美と、旅行の約束をして、汽車の時間を二時間三時間おくらせてしまおう。たとえば私が出かけようとして身支度ととのえているところへ、知りあいの隠居ジイサンなどがやってきて、ほらごらんよ、うちの孟宗でこんなタバコ入れをこしらえたから、などと見せにきて一時間二時間話しこむ。私は嫌いな人にも今日は用があるから帰ってなどとは言えない

たちで、まして仲よしの隠居ジイサンだから、帰って、とはとても言えない。私は私の意志によつてどつちの好きな人を犠牲にすることもできないから、眼前に在る力、現実の力というものの方にひかれて一方がおろそかになるまでのことで、これは私にとつては不可抗力で、どうすることもできないのだもの。

久須美はそういう私をいたわってくれた。だから私たちの旅行はトンチンカンで、目的地へつかないうちに、この汽車はここまでだから降りてくれという、つまり汽車がなくなつたのだ、仕方なしに思いがけないところで

降されて、然し、そのために叱られるということのない私はそのトンチンカンが新鮮で、パノラマを見ているような楽しい思いがけない旅行になる。

ほんとうに醜い人間などいるはずのないもので、美というものは常に停止して在るのじゃなくて、どんなものでも、ある瞬間に美しかったり、醜かったりするものだ。

私にとって、寢室の久須美は常に可愛く、美しかった。

私は若い女だもの、美しい青年と腕を組んで並木路を歩いたり、美青年に荷物をもってもらったり自動車をよびに走ってもらったり、チャホヤかかずかれて銀座など

買物に歩いて、人波を追いつ追われつ、人波のあいまから目と目を見合せて笑いあう。

久須美にはもうそんな若い目はなくなっている。そして、そんな仇な目のかわりには、ゴホンゴホンという咳などしなくなっているのである。

然し、そんな若い目は、男と女のつながりの上では、たかが風景にすぎないではないか。並木路の散歩、楽しい買物、映画見物、喫茶店、それらのことは、恋人同士の特権のように思われがちだけれども、私はあべこべに、浮気心、仇心の一興、また、一夢というようなものにす

ぎないと考える。

私はむかし六人の出征する青年に寢室でやさしくしてあげたが、又、終戦後も、久須美の知らないうちに、何人かの青年たちと寢室で遊んだこともある。けれどもそれもただ男と女の風景であるにすぎず、いわば肉体の風景であるにすぎない。

然し久須美に関する限り私はもはや風景ではなかった。

私が一人ぽっちなころんで、本を読んでいたたり、物思いにふけっていたり、うとうととしているとき久須美が訪

れてくる。どのような面白い読書でも、静かな物思いでも、安らかな眠りでも、私はそれを捨てたことを露すらも悔みはしない。私はただニツコリし、彼をむかえ、彼の愛撫をもとめ、彼を愛撫するため、二本の腕をさしだして、彼をまつ。私はその天然自然の媚態だけが全部であった。

このような媚態は、久須美が私に与えたものであった。私はその時まで、こんな媚態を知らなかったのに、久須美にだけ天然自然にこうするようになったので、つまり彼が一人の私を創造し、一つの媚態を創作したようなも

のだった。

それは一つの感謝のまごころであつた。このまごころは心の形でなしに、媚態の姿で表われる。私はどんなに快い眠りのさなかでもふと目ざめて久須美を見ると、モロモロたる嗜眠^{しみん}状態のなかでニツコリ笑い両腕をのばして彼を待ち彼の首ににじりよる。

私は病氣の時ですら、そうだった。私は激痛のさなか
に彼を迎え、私は笑顔と愛撫、あらゆる媚態を失うこと
はなかつた。長い愛撫の時間がすぎて久須美が眠りにつ
いたとき、私は再び激痛をとりもどした。それはもはや

堪えがたいものであったが、私は然し愛撫の時間は一言の苦痛も訴えず最もかすかな苦悶の翳かげによって私の笑顔をくもらせるようなこともなかつた。それは私の精神力というものではなく、盲目的な媚態がその激痛をすら薄めているという性質のものであった。七転八倒というけれども、私は至極の苦痛のためにある一つの不自然にゆがめられた姿勢から、いかなる身動きもできなくなり、生れて初めて呻く声をもらした。久須美は目をさまし、はじめは信じられない様子であったが、慌てて医師を迎えたときは手おくれで、なぜなら私はその苦痛にもかか

わらず彼が自然に目をさますまで彼を起さなかつたから、すでに盲腸はうみただれて、腹の中は膿だらけであり、その手術には三時間、私は腹部のあらゆる臓器をいじり廻されねばならなかつた。

この天然自然の育ち創られてきた媚態を鑑賞している人は久須美だけが一人であつた。

若い目と目が人波を距ててニツコリ秘密に笑いあうとき、そこには仇な夢もこもり、花の匂いも流れ、若さのおのずからの妖しさもあつたが、だから又、そこには、退屈、むなしさ、自ら己を裏切る理智もあつた。要する

に仇心、遊びと浮氣の目であつた。

美青年に手を握られてみたいような、なんとなくそんな氣持になる時もあり、美青年と一緒に泊りたわむれてウツトリさせられたり、私は然しそんな遊びのあとでは、いつも何かつまらなくて、退屈、私は心の重さにうんざりするのであつた。

然し私が久須美をめがけてウツトリと笑い両手を差しのべてにじりより、やがて胸に白髪をだきしめて指でなでたりいじってやったり愛撫に我を忘れるとき、私の笑顔も私の腕も指も、私のまごころの優しさが仮に形をな

した精、妖精、やさしい精、感謝の精で、もはや私の腕でも笑顔でもなく、私自身の意志によって動くものではないようだった。

つまり私は本性オメカケ性というのだろう。私の愛情は感謝であり、私は浮気ของときは男に遊ばせてもらってウツトリさせられたりするけれども、私自身が自然の媚態と化してただもう全的に男のために私自身をささげるときは、感謝によるのであった。要するに私は天性の職業婦人で、欲しいものを買っていただけ、好きな生活をさせてもらう返礼におのずから媚態と化してしまう。そ

のかわりお洗濯をしてあげたいとか、お料理をこしらえて食べさせてあげたいとか、考えたこともない。そんなものはクリーニング屋とレストランで間に合わせればよいと思っており、私は文化とか文明というものはそういうものだと考えていた。

私は然しあんまり充ち足り可愛がられるので反抗しい気持になることがあった。反抗などということとはミミツちくくて、私はきらいなのだ。私は風波はすきではない。度を過した感動や感激なども好きではない。けれども充ち足りるといふことが変に不満になるのは、これも私の

わがままなのか、私は、あんな年寄の醜男に、などと、私がもう思いもよらず一人に媚態をささげきっていることが、不自由、束縛、そう思われて口惜しくなったりした。実際私はそんな心、反抗を、ムダな心、つまらぬこと、と見ていたが、おのずから生起する心は仕方がない。

ふと孤独な物思い、静かな放心から我にかえったとき、私は地獄を見ることがあった。火が見えた。一面の火、火の海、火の空が見えた。それは東京を焼き、私の母を焼いた火であった。そして私は泥まみれの避難民に押しあいへしあい押しつめられて片隅に息を殺している。私

は何かを待っている。何ものかは分らぬけれどそれは久須美でないことだけが分っていた。

昔、あ那个时候、あの泥まみれの学校いっばいに溢れたつ悲惨な難民のなかで、私は然し無一物そして不幸を、むしろ夜明けと見ていたのだ。今私がふと地獄に見る私には、そこには夜明けがないようだ。私はたぶん自由をもとめているのだが、それは今では地獄に見える。暗いのだ。私がもはや無一物ではないためかしら。私は誰かを今よりも愛すことができる、然し、今よりも愛されることは有り得ないという不安のためかしら。燃える火の

涯もない曠野のなかで、私は私の姿を孤独、ひどく冷めたい切なさに見た。人間は、なんてまアくだらなく悲しいものだろう、馬鹿げた悲しさだと私はいつもそんなときに思いついた。

私が入院しているとき、お相撲の部屋の親方だかが腫物か何かで入院しており、一門のお弟子、関取から取的まで、食事のドンブリや鍋に何か御馳走を運んできたり、お酒をぶらさげてきたり賑やかだったが、その一人に十両の墨田川というのは私の同じ町内、同じ国民学校の牛肉屋の子供で、出征の前夜に私の許した一人であった。

さっそく私に結婚してくれなどと言ったけれども、彼も物分りの悪い男ではなく、女に不自由のない人気稼業で、十両ぐらいで結婚なんて、おかしいでしょう、と言うと、じゃア時々会ってなどと云ったが、病後だからとその時はすんだけれども、巡業から戻ってくるたび、毎日のようにやってくる。

墨田川は下町育ちだから理づめの相撲で、突っぱって寄る、筋骨質でふとってはいないけれど腰が強くて投げもあり、大関までに行けると噂のある有望力士であったが、下町気風のあっさり勝負を投げてしまふところがあ

って、しつこく食いさがるねばりがない。稽古の時は勝つても負けてもとても綺麗で、調子づくくと五人十人突きとばして役相撲まで食ってしまう地力があるのに、本場所になると地力がでずに弱い相手に負けるのは、ちよつと不利になるとシマツタと思う、つまり理智派の弱点で、自分の欠点を知っているから、ちよつとの不利にも自ら過大にシマツタと思う気分の方が強くて、不利な体勢から我武者羅に悪闘してあくまでネバリぬく執拗なところが足りないのだ。シマツタと思うとズルズル押されて忽ちたわいもなくやられてしまう。弱い相手に特にそうで、

強い相手には大概勝つ。つまり強い相手には始めから心構えや気組みが変って慎重な注意と旺盛な闘志を一丸に立向っているからなのである。

私は勝負は残酷なものだと思った。もてる力量などはとてもたよりないもので、相撲の技術や体力や肉体の条件の外に、そういう精神上の条件、性格気質などもやっぱり力量のうちなのだろうか。有利の時にはちっともつけあがらず、相撲しすぎるといふことがなく、理づめに慎重にさばいて行く、いかにも都会的な理智とたしなみと落着きが感じられるくせに、不利に対して敏感すぎて、

彼の力量なら充分押しかえせる微小な不利にも頭の方で先廻りをして敗北という結果の方を感じてしまう。だから一気に弱気になって、こんなことではいけない、ここでガンバラなくてはと気持ちをとのえた時には、もう取り返しがつかないほど追いこまれていて、どうにもならない。

私は稽古も見に行つたし、本場所は毎日見た。彼は私の席へきて前頭から横綱の相撲一々説明してくれるが、力と業の電光石火の勝負の裏にあまり多くの心理の時間があるのを知つた。力と業の上で一瞬にすぎない時間が、

彼等の心理の上では彼等の一日の思考よりも更に多くの思考の振幅があるのであった。大きな横綱が投げとばされて、投げにかけられる一瞬前に、彼の顔にシマツタというアキラメが流れる、私にはまるでシマツタという大きな声がきこえるような気がするのだった。

相撲の勝負はシマツタと御当人が思った時にはもうダメなので、勝負はそれまで、もうとりかえしがつかない。外の事なら一度や二度シマツタと思ってもそれから心をとおり直して立ち直ってやり直せるのに、そのきかない相撲という勝負の仕組みはまるで人間を侮蔑するように

残酷なものに思われた。相撲取りの心が単純で気質的に概してアツサリしているのは、彼等の人生の仕事が常に一度のシマツタでケリがついて、人間心理のフリ出しだけで終る仕組みだから、だから彼等は力と業の一瞬に人間心理の最も強烈、頂点を行く圧縮された無数の思考を一気に感じ、常に至極の悲痛を見ているに拘らず、まるでその大いなる自らの悲痛を自ら嘲笑軽蔑侮辱する如くにたった一度のシマツタですべてのケリをつけてしまひ、そういう悲劇に御当人誰も気付いた人がなく、みんな単純でボンヤリだ。

エツちゃん（墨田川は私たちの町内ではそうよばれて
いた）は特別わが心理の弱点で相撲の勝負をつけてしま
い、シマツタと思わなくともよいところで、過大に又先
廻りをしてシマツタと思つて、そしてころころ負けてし
まう。エツちゃんの勝負を見ていると、ア、シマツタ、
とか、やられた、とか、ア、畜生め、なんでい、そうか、
一瞬の顔色が、私にはいつもその都度色々の大きな呼び
声にきこえてきて、するともう見ていられない気持にな
る。

あなたは御自分の不利にだけ敏感すぎるからダメなの

よ。御自分のアラには気がつかず人のアラばかり気がつく人なんてイヤだけど、相撲の場合はそういうヤボテンの神経でなければダメなんだわ。いつでも何クソとねばらなければいけないわ。そうすれば、大関にも横綱にもなれるのよ。私は彼にそう言った。この忠言は彼をかなり発奮させ、二三度勝って気を良くしたが、その次の相撲で、例のシマツタ、そこで一気に不利になり、いつもならもうダメなところで私の忠告がきいたのか、思いもよらず立ち直って、とうとう五分の体勢まで押し返したから、すばらしい、エツちゃんとうとう悟りをひらいて、

もう、こうなれば勝てると思ったのに、阿修羅の怪力大勇猛心で立直りながら急にそこから気がぬけたようにズルズルと負けてしまった。そしてそれからまた元のモクアミ、自信を失っただけ、却っていけないようなものだった。

「どうしてあそこで気がぬけたの。でも、あそこまで、立ち直ったのですもの、気持をくさらせて投げてしまわなければ、あなたは立直る実力があるのね。そこまでは証明済みですから、今度はその先をガンバツてごらんなさい」

と私のはげましてあげても、エツちゃんには浮かない顔で、いつぺん自信がくずれると、せっかくの大勇猛心や善戦が身にすぎた奇蹟のように思われるらしく、その後には益々ネバリがなくなり、シマツタと思うと全然手ごたえなくへタへタだらしくなく負けるようになった。

力だけが物をいうヤボな世界だと思っていたのに、あんまり心のデリケートな世界で、精神侮蔑、人間侮蔑、残酷、無慙むざんなものだから、私はやりきれなかった。昔は関脇ぐらいまでとり、未来の大横綱などといわれた人が、十両へ落ち、あげくには幕下、遂には三段目あたりへ落

ちて、大きな身体で又コロコロ負かされている。芸術の世界などだったら、個人的に勝負を明確に決する手段がないのだから、落伍者でも誇りやウヌボレはありうるのに、こうしてハッキリ勝敗がつく相撲というものでは負けて落ちて行く、ウヌボレ慰めの余地がない。残酷そのもの、精神侮蔑、まるで人の当然な甘い心をむしりとり人間の畸形児をつくりあげている、堪えがたい人間侮蔑、だから私はエツちゃんが勝ったときは却ってほめてやる気にならず、負けた時には慰めてやりたいような気持ちになつた。

その場所の始まる前に巡業から帰ってきて、「僕はサチ子さんの気質を知っているから、くどく言いたくないけれど、好きなんだから仕方がないよ。いつも口説くたんに、ええ、そのうちに、とか、いつかね、とか、どうもね。だから、こっちもキマリが悪いけど僕も、もう、東京がつくづく厭でね、それというのが本場所があるからで、以前は本場所を待ちかねたものだけど、ちかごろは重荷で、そのせいだけで、ふるさどのお江戸へ帰るのが苦しいのさ。それでもいくらか帰る足が軽くなるのはサチ子さんがいるということ一つだけで、さもなきや、

廃業したいくらい厭気ざしているのだが、廃業しちやア、サチ子さんも相手にしてくれないだろうなぞと考えて、ともかく裸シヨウバイになんとか精を出すように努めているのだ。こんな僕だから思いはいっぱいだけど、自分一人勝手のわがままは言いたくない。それはこんなシヨウバイをしているオカゲで、取柄といえは、女と男のこどだけはいくらか身にしみて分るんだな。僕らはよくヒイキの旦那の世話になる。旦那というものにはオメカケがいるものだが、旦那はみんないい人たちで、だからサチ子さんの旦那でも僕には旦那という人が、みんないた

わってあげたいような気持ちになる。だから僕の見てきたところでも、オメカケが浮気をしてロクなことになったタメシはないね。罰が当るんだ。けれども、サチ子さん、僕にはもう心の励みがあなた一人なんだから、僕は決して女房になってくれ、そんな無理なことは言わない。こうして毎日つきあってもらって、それで満足できりゃいいけど、別れて帰ると、なんとも苦しい。ほかの女でまにあうというものじゃアないんでね。巡業に出ているうちは忘れられる。こうして目の前に見ちや、ダメだ。僕が相撲をとってるうち、そして、東京へ戻った時だけ、

遊んで貰うわけには行かないか」

その場所エツちゃんは十両二枚目で、ここで星を残すと入幕できるところであつた。私はなんとなくエツちゃんを励まして出世させたいと思つたから、

「そうね、じゃア、今場所全勝したら、どこかへ泊りに行ってあげる」

「全勝か。全勝はつらいね」

「だって女の気持はそんなものだわ。関取がギターかなんか巧くたったって、そんなことで女は口説かれないと思うわ。関取は相撲で勝たなきゃダメよ。あなたの全勝で

買われたと思えば、私だって気持ちに誇りがもてるわ」

「よし、分った。きつと、やる。こうなりや是が非でも全勝しなきやア」

然し結果はアベコベだった。エツちゃんはそのういう氣質なのだ。励んだり、気負いたっているとき、出はなに躓つまずくと、ずるずると、それはもう惨めとも話にならぬだらしなさで泥沼へ落ちてしまう。初日に負けて、いいのよ、あとみんな勝って下されば、二日目も負け、いいわ、あと勝って下されば、で千秋楽まで、楽の日は私もとうとうふきだして、いいわ、楽に初日をだしてよ、き

っと約束までもってあげる、けれどもダメ、つまり見事にタドンであった。

エツちゃんには都会人らしい潔癖があるから、初日に躓いたとき、もうダメだったので、約束通り全勝して晴れて私を抱きしめたかったに相違ない。おなさけ、というようなことでは自分自ら納得できない気分を消し去ることができない気質であった。

私は然しエツちゃんが約束通り全勝したら、とても義務的なつきあいしか出来なかったと思うけれども、見事にタドンだから、いじらしくて、せつなくなつた。

私はエツちゃんを励まして、共に外へでた。まだ中入前で、久須美は何も知らずサジキに坐つて三役の好取組を待っているのだが、私は急に心がきまると、久須美のことは殆ど心にかからず、ただタドンのいじらしさ、人間侮蔑に胸がせまって、好取組の見物などという久須美が憎いような気持まで流れた。

「私、待合や、ツレコミ宿みたいなところ、イヤよ。箱根とか熱海とか伊東とか、レッキとした温泉旅館へつれて行ってちようだい。切符はすぐ買えるルート知ってるのよ」

「でも僕は明日から三四日花相撲があるんだ。本場所とちがつて、こつちの方は義理があるのでね」

「じゃアあなた、あしたの朝の汽車で東京へ帰りなさい」

私はすべて予約されたことには義務的なことしかできず私の方から打ちこむことができない夕子であつたが、思いがけない窓がひらかれ気持がにわかには引きこまれると、モーローたる常に似合わず人をせきたて有無を言わず引き廻すような変に打ちこんだことをやりだす。私自身が私自身にびっくりする。女というものは、まった

く、たよりないものだ、と私はそんな時に考える。

温泉で意気銷沈いきしょうちんのエツちゃんにお酒をすすめて、そして私たちが寢床についたとき、

「エツちゃん、今まで、言うの忘れてたわ」

「なにを？」

「ごめんね」

「なにをさ」

「ごめんねを言うのを忘れてたのよ。ごめんなさい、エツちゃん」

「なぜ」

「だって、とても、人間侮蔑よ」

「人間侮蔑って、何のことだい」

「全勝してちようだい、なんて、人間侮蔑じゃないの。私、エツちゃんにブン殴られてもいいと思ったわ」

エツちゃんはわけが分らない顔をしたが、私は私のことだけで精いっぱいになりきるだけの夕子だから、

「エツちゃんはタドン苦しいの？　平気じゃないの。私むしろとても嬉しいのよ。許してちようだいね。私が悪かったのよ。だから、エツちゃん」

私は両手をさしのべた。久須美のほかの何人にも見せ

たことのない天然自然の媚態がおのずから私のすべてにこもり、私はもはや私のやさしい心の精であるにすぎなかった。

翌日、エツちゃんは明るさをとりもどしていた。それは本場所のタドンよりも私との一夜の方がプラスだという考えが彼を得心させたからで、そして彼がそういう心境になったことが、私の気分を軽快にした。

「人間侮蔑って言ったね。僕が人を土俵にたたきつけるのが人間侮蔑だってえのかい。だって、それじゃア、年中負けてなきやアお気に召さないてんじやア」

「そうじゃないのよ」

「じゃアなんのことだい」

「いいのよ、もう。私だけの考えごとなんですから」

「教えてくれなきや、気になるじゃないか。かりそめにも人間侮蔑てえんだからな」

「言っても笑われるから」

「つまり、女のセンチなんだろう」

「ええ、まア、そうよ。綺麗な海ね。ここが私の家だったら。私、今朝からそんなことを考えていたのよ」

「まっただくだなア。土俵、見物衆、巡業の汽車、宿屋、

僕ら見てるのは人間と埃ばっかり、どこへ行っても付きまどっていやがるからな。なア、サチ子さん、相撲とりが本場所が怖くなるようじゃア、生れ故郷の墨田川へ戻るのが怖しくって憂鬱なんだから、僕はお前、こんなところでノンビリできりやア、まったく、たまらねえな」

「花相撲に帰らなくってもいいの？」

「フツツリよした。叱られたって、かまわねえ。義理人情じゃア、ないよ。たまにやア人間になりてえ。オイ、見てくれ。これ、このチョンマゲ、こいつだな。人間じゃないてえシルシなんだ。雞に雞の形があるみたいに、

相撲とりの形なんだぜ。昔はこいつが自慢の種で、うれしかったものだけど」

私たちは米を持ってこなかった。エツちゃんが宿の人に頼んで一度は食べさせてくれたけれども、ほんとになくて困ってるのだから、なんとか自分で都合してくれという。私が財布を渡すと、ホイきた、とエツちゃんは立上った。

「ほんとに買える？ 当があるの？」

「大丈夫大丈夫」

「じゃア、私もつれて行って」

「それがいけねえワケがある。一ツ走り行つてくるから、ちよつとの我慢」

やがてエツちゃんは二斗のお米と鶏四羽、卵をしこたまぶらさげて戻つてきて、旅館の台所へわりこんでチャンコ料理だの焼メシをつくつて女中連にも大盤ふるま
い。

「わかるかい、サチ子さん、お前をつれて行けなかつたわけが。つまりこれだ、チョンマゲだよ。こういう時には、きくんだなア、お相撲が腹がへっちやア可哀そうだてんで、お百姓はお米をだしてくれる、お巡りさんは見

のがしてくれる、これがお前、美人をつれて遊山気分じやア、同情してくれねえやな。アツハツハ」

「じやア、チョンマゲの御利益ね」

「まっただ。因果なものだな」

夕靄にとける油のような海、岬の岸に点々と灯が見える。静かな夕暮れであった。私はおよそ風景を解するたちではないのだが、なんとなく詩人みたいにシンミリして、だらしなく長逗留をつづけることになってしまった。

私の家には婆やと女中のほかに、ノブ子さんという私の二ツ年下の娘が同居していた。戦争中は同じ会社の事

務員だったのだが、戦災で一挙に肉親を失った。久須美の秘書の田代さんというのが、久須美から資本をかりて内職にさるマーケットへ一杯のみ屋をひらくについて、ノブ子さんが根が飲食店の娘で客商売にはあつらえ向きにできてるものだから、表向きはノブ子さんをマダムと
いうように頼んだわけだが、まだ二十、はたちマダムになった
ときが十九というのだから嘘みただけど、実際チャツ
カリ、堂々と一人前以上に営業しているのである。

思いがけない長逗留で、お金が足りなくなつたので、
ノブ子さんにたのんで秘密にお金をとどけて貰う手筈を

したが、ノブ子さんは田代さんと同道、温泉までお金をとどけに来てくれた。

田代さんはノブ子さんが好きで、一杯のみ屋のマダムは実は口実で、ていよく二号にと考えてやりだしたことであったが、ノブ子さんも田代さんが好きで表向きは誰の目にも旦那と二号のように見えるが、からだを許したことはない。

久須美の秘書の田代さんが来たものだからエツちゃん
が堅くなると、

「イヤ、そのまま、私は天下の闇屋です、ヤツガレ自身

が元来これ浮気以外に何事もやらぬ当人なんだから」

実際私は田代さんが来てくれた方が心強かった。なぜなら彼は自ら称する通り性本来闇屋で、久須美の秘書とはいっても実務上の秘書はほかにあって、彼はもっぱら裏面の秘書、久須美の女の始末だの、近ごろでは物資の闇方面、そっちにかけてだけ才腕がある。彼を敵にまわさぬことが私には必要だった。

「これ幸いと一役買っていたのね。ノブ子さんと温泉旅行ができるから。もっぱら私にお礼おっしゃい」

「まさにその通りです。ちかごろ飲食店が休業を命ぜられて、ノブちゃんは淫売しなきや食えないという窮地に立ち至って、私の有難味が分ったんだな。サービスがやや違ってきたです。そこへこの一件をききこんだから、これ幸いと実は当地においてノブちゃんをねんごろ懇ねんごろに口説こうというわけです。今日あたりは物になるだろうな。ノブちゃん、どうだい、この情景を目の当り見せつけられちやア、ここで心境の変化を起してくれなきや、私もやりきれねえな」

「ほんとにサチ子さん、すみません。私ひとり、お金を

とどけるつもりだったけど、私、一存で田代さんに相談しちやったのよ。だって心配しちやったのよ、このまま放つといて、あとあと……」

私もノブ子さんがこうしてくれることを予想していたのであった。

ノブ子さんは表面ひどくガツチリ、チャツカリ、会社にいたころも事務はテキパキやってのけるし、飲み屋をやっつてからも婆やを手伝いにつけてあるのに、自転車で買いだしにでる、店のお掃除、人手をかりずに一人で万事やる上に、向う三軒両隣、近所の人のぶんまでついで

に買い出してやったり、隣りの店の人が病気でシヨウバ
イができず、さりとて寝つけば食べるお金にも困るとい
う、するとノブ子さんは自分の店の方をやめて、隣の店
で働いてやるという、女には珍しい心の娘であった。

だから活動的で、表面ガツチリズムの働き者に見える
けれども、実際はもうからない。三角クジだの宝クジだ
の見向きもしたことがなく、空想性がなく着実そのもの
だけれども、人の事となると損得忘れてつくしてやって
一銭ずつの着実なもうけをとたんにファイにしてしまう。

田代さんはノブ子さんの美貌と活動性とチャツカリズ

ムに目をつけて、大いにお金をもうけるつもりでかかったのに、一向にもうけもなく、おまけにノブ子さんは売上げの一割は手をつけずにおいて、自分の方にもうけがなくともこの一割だけは田代さんの奥さんへとどけてやる。万事万端意想外で田代さんは呆気にとられたが、この人が又、金々々、金が欲しくて堪らない、金のためなら何でもするという御人のくせに、御目当の金の夢、然し営業不成績をあきらめて、ノブちゃんの純情な性質の方をいたわった。

「然しノブちゃん、からだぐくらい、処女をまもるなん

て、つまらねえな、そんなこと。私の女房に悪いから、なんて、ねえ奥さん（彼は私をこうよんだ）人間は本性これ浮気なものだから、かりそめに男を想う、キリスト曰いわく、これすでに姦淫です。心とからだは同じことだよ。からだだけは何んて、そんな贗物はいけねえな。だから奥さんを見習え、てんだ。奥さんは浮気、からだ、そんなこと、てんで問題にもしていねえ。だから又、うちのオヤジと奥さんとは浮気の及ばざる別のつながりが有りうることになるのだな。ここのところを見なきやア。からだにこだわったんじやア、だからノブちゃんは大学生

だのチンピラ与太者に崇拜されたりなんかして、そういうクダラナサが分らねえのだから切ないよ。どうしてこういう物の道理が分らねえのか、ねえ、奥さん」

田代さんがノブ子さんを私のところへ同居させたのも、なんとかして私の浮気精神をノブ子さんに伝授させたい念願だから、特別私の目の前でせつせと口説くけれども、私は笑って見物、助太刀してあげたことがない。「奥さん、ノブちゃんの心境を変えるようになんとか助けて下さいな」

「だめ。口説くことだけは独立独歩でなければだめよ」

「友情がねえな、奥さんは。すべてこの紳士淑女には義務があるです。それは何かてえと友の恋をとりもつてえことですよ。私が女をつれて友だちに会う。するてえと、私は友達よりも私の方が偉いように威張り、又、りきむです。これ浮気の特権ですな。したがって又友だちが女をつれて私の前へ現れたときは、私は彼の下役であり、又鈍物であるが如く彼をもちあげてやるです。これを紳士の教養と称し義務と称する、男女も亦友人たるときは例外なくこの教養、義務の心掛がなきや、これ実に淑女紳士の外道だな。奥さんなんざア、天性これ淑女中の

大淑女なんだから、私が言わなくつとも、なんとかして下さるはずなんだと思うんだけどな」

ノブ子さんには大学生が口説いたり附文したり、マーケットの相当なアンちゃん連が二三人これも口説いたり附文したり、何々組のダンスパーティーなどと称して踊りを知らないノブ子さんを無理につれて行くから、田代さんのヤキモキすること、テゴメにされちゃア、あの連中、やりかねねえから、など、帰ってくるまで落着かない。からだなんざアとか、処女なんて、とか言ってるくせに、案外そうでもないらしいから、私がからかってあげる。

それは、あなた、だって、なにも、くだらなく傷物になることはないからさ、誰だってあなた、好きな人が泥棒強盗式みてえに強姦されたんじやア、これは寝ざめが悪いや。かほど熱心に口説いているけど、ノブ子さんはウンと言わない。けれども田代さんが好きなのである。

私と全然似てもつかないノブ子さんは、私のもろい性質、モウロウたるたよりなさを憐れんで、私よりも年上の姉さんのように心配してくれた。然し実際は表面強気
のノブ子さんが実際は自分の行路に自信がなくて、営業
のこと、恋のこと、日常の一々に迷い、ぐらつき、薄氷

を踏むようにして心細く生きているのを私は知りぬいており、私は無口だから優しい言葉なんかで、いたわってあげることはないけれども、身寄りのないノブ子さんは私を唯一の力にしてもいた。

「奥さん、然し、まずかったな。浮気という奴は、やっぱり、誰にも分らないようにやらなきやダメなものですよ。然し、ここで短気を起しちや、尚いけない。それが一番よくないのだから、何くわぬ顔で帰ること。そして、なんだな、関取と泊った、そこまでは分っているから仕方がないが、一緒に泊ったが、関係はなかった、いいで

すか、こいつを言い張るのが何よりの大事です。言い張って、言い張りまくる、疑りながらも、やっぱりそうでもねえのかな、と、人間てえものは必ずそう考える動物なんだから、徹頭徹尾、関係はなかった、そう言い張っていりやア、第一御本人までそう思いこんでしまうようなものでさア。分りましたか」

然し田代さんは私のことよりも自分のことの方が問題なのだ。ノブ子さんは田代さんと同じ部屋へ寝るのが厭だと言ったのだが、田代さんはさすがにいくらか顔色を変えて、ノブちゃん、そりやアいけない。そこまで私に

恥をかかしちやいけないよ。旅館へあなた男女二人できて別の部屋へ泊るなんて、そりやアあなた体裁が悪い、これぐらい羞かしい思いはないよ。同じ部屋へねたって、それは私は口説きますよ、口説きますけど、暴力を揮いやしまいし、そういう信用は持ってくれなきや、そこまですら私に恥をかかしちや、まるで、ノブちゃん、それじゃア私が人格ゼロみたいのものじゃないか。

男たちが温泉につかっているとき、ノブ子さんは私に、「どうしたらいいかしら。田代さんを怒らしてしまったけど、つらいのよ。寢床の中で口説かれるなんて、第一

私男の人に寝顔なんか見せたことないでしょう。寢床の中で口説かれるなんて、そんなこと、私田代さんに惨めな思いさせたり惨めな田代さん見たくないから、許しちやうかも知れないのよ。そんな許し方したら、あとあと侘しくて、なさけないじゃないの。そうでしょう。だから、いっそ、私の方から許してしまったら。なんだか、ヤケよ。サチ子さん、どうしたらいいの。教えてちょうだい」

「私には分らないわ。あんまりたよりにならなくて、ノブ子さん、怒らないでね。私はほんとに自分のことも何

一つ分らないのよ。いつも成行にまかせるだけ。でも、ほんとに、ノブ子さんの場合は、どうしたらいいのかしら」

「ヤケじゃアいけないでしょう」

「それは、そうね」

その晩の食卓で私は田代さんにいった。

「田代さんほどの人間通でもノブ子さんの気持がお分りにならないのね。ノブ子さんは身寄りがないから、処女が身寄りのようなものなのでしよう。その身寄りまでなくしてしまうとそれからもう闇の女にでもなるほかに

当のないような暗い思いがあるものよ。私のような浮気っぽいモウロウたる女でも、そんな気持がいくらかあるほどですもの、女は男のように生活能力がないから、女にとつては貞操は身寄りみたいなものなんでしよう、なんとなく、暗いものなのよ。ですから、ノブ子さんのただ一つの身寄りを貰うためでしたら、身寄りがなくとも暮せるような生活の基礎が必要でしょう。前途の不安がないだけの生活の保証をつけてあげなくては。口約束じやアダメ。はつきり現物で示して下さらなくては」

「それは無理ムタイという奴だな奥さん。それはあなた

は、あなたの彼氏は天下のお金持だから、だけど、あなた、天下無数の男という男の多くは全然お金持ではないのだからな。処女というものを芸者の水揚げの取引みたいに、それは、あなた、むしろ処女の侮辱だな。むろん、あなた、私はノブちゃんを大事にしますよ。今、現に、私がノブちゃんを遇する如くに、です。それ以外に、あなた、水揚料はひでえな」

「水揚料になるのかしら。それだったら、私もタダだったわ」

「それ御覧なさい。それはあなた、処女は本来タダです

よ」

「私の母が私の処女を売り物にするつもりだったから、私反抗しちやっただのよ。でも、今にして思えば、もし女に身寄りがなかったら、処女が資本かも知れなくってよ。だって芸者は水揚げしてそれから芸者になるのでしょう。私の場合は、処女というヨリドコロを失うと闇の女になりかねない不安やもろさや暗さに就て言うのです。ですから処女をまもるのは生活の地盤をまもるのよ」

「かつて見ざる鋭鋒えいほうだな。奥さんが処女について弁護に及ぶとは、女は共同戦線をはるてえと平然として自己を

裏切るからかなわねえなア。共同の目的のためというのはストライキの原則だけど、己をむなし虚うし、己を裏切るてえのは、そんなストライキはねえや。それはあなた、処女が身寄りのようなものだてえノブちゃんの心細さは分りますとも。けれどもそんな心細さはつまりセンチメンタリズムてえもので、根は有害無益なる妖怪じみた感情なんだなア。処女ひとつに女の純潔をかけるから、処女を失うてえと全ての純潔を失ってしまう。だから闇の女になるですよ。けれどもあなた純潔なるものはそんなチャチなものじゃない。魂に属するものです。私は思う

に日本の女房てえものは処女の純潔なる誤れる思想によつて生みなされた妖怪的性格なんだなア。もう純潔がないのだから、これ実に妖怪にして悪鬼です。金銭の奴隷にして子育ての虫なんだな。からだなんざアどうだって、亭主の五人十人取りかえたつて、純潔てえものを魂に持つてなきやア、ダメですよ。そこへいくとサチ子夫人の如きは天性てんでからだなんか問題にしていない人なんだから、そしてあなた愛情が感謝で物質に換算できるとえのだから、自ら称して愛情による職業婦人だというのは、だから、これは天晴れ、胸のすくような淑女なんだな。

そのあなたが、こともあろうに、いけません、同情ストライキ、それはいけない。あなたはあなたでなきやアいけない。関取、そうじゃないか、サチ子夫人がかりそめにも浮気の大精神を忘れて、処女の美德をたたえるに至っては、拙者はあなた、こんなところへワザワザ後始末に来やしませんや。私はあなたサチ子夫人を全面的に尊敬讚美しその性向行動を全面的に認める故に、犬馬の労を惜しまぬのです。かかる熱誠あふるる忠良の臣民を歎かせちやアいけねえなア」

田代さんの執念があまり激しすぎるので、楽な気持ちに

なれない。私だったらノブ子さんとは違った意味で許す
気持にならないけれども、ノブ子さんは田代さんを愛し
もし尊敬もしているのだから、処女ぐらいに、ああまで
エコジに守るのが私には分らない。私は実際は、こんな
こと、ただうるさいのだ。

その夜、田代さんたちが別室へ去ってから、
「え、サチ子さん。ノブ子さんは可哀そうじゃねえのか
な」

「なぜ」

「だってムツツリ、シヨンボリ、考えこんでいたぜ。イ

「ヤなんだろう」

「仕方がないわ。あれぐらいのこと。いろいろなことがあるものよ、女が一人でいれば」

「ふーん。色々なことって、どんなこと」

「いろんな人が、いろんなふうに口説くでしょう」

「そういうものかなア。僕なんざ、めったに口説いたことも口説かれたこともないんだがな。だけど、あれぐらいムツツリと思いつめて考えてるんじゃないア」

「あなただって私をずいぶん悩ましたじゃないの」

「なるほど、そうか。そして結局こんなふうになるわけ

か」

「罰が当るって、なによ」

「なんだい？ 罰が当るって」

「いつか、あなた、言ったでしょう。オメカケが浮気してロクなことがあったタメシがないんだって。罰が当るんだって。罰が当るって、どんなこと？」

「そんなことを言ったかしら。覚えがねえな。だって、お前、お前は別だ」

「なぜ。私もオメカケの浮気ですもの」

「お前は浮気じゃないからな。心がやさしすぎるんだ」

「たいがいのオメカケがそうじやないの？」

「もう、かんべんしてくれ。僕は然し、お前を苦しめちやアいけねえから、フツツリ諦めよう。これからはもう相撲いちずにガムシヤラにやってやれ。然し、お前のことを思いださずに、そんなことができるかな」

「私は思いださない」

「僕がもうそんなに何でもないのか」

「思いだしたって、仕方がないでしょう。私は思いだすのが、きらい」

「お前という人は、私には分らないな」

「あなたはなぜ諦めたの？」

「だってお前、僕は貧乏なウダツのあがらねえ下ツパ相
撲だからな。お前は遊び好きの金のかかる女だから」

「諦められる」

「仕方がねえさ」

「諦められるなら、大したことはないのでしょう。むろん、
私も、そう。だから、私は、忘れる」

「そういうものかなア」

「つまらないわね」

「何がさ」

「こんなことが」

「まったくくだな。味気ねえな。僕はもう生きるのも面倒なんだ」

「そんなことじゃアないのよ。私は生きてることは好きよ。面白そうじゃないの。又、なにか、思いがけないよ。うなことが始まりそうだから。私は、ただ、こんなことがイヤなのよ」

「こんなことって？」

「こんなことよ」

「だから」

「しめっぽいじゃないの。ない方が清潔じゃないの。息苦しいじゃないの。なぜ、あるの。なければならぬの。なくて、すまないことなの？」

エツちゃんは答えなかったが、ノツソリ起きて、閉じられた雨戸をあけて庭下駄を突ツかけて外へでて行つた。闇夜なのだか月夜なのだか、私は外のことなど見も考えもしなかったが、エツちゃんは程へて戻ってきて私の胸の上へ大きな両手をグイとついた。力をいれたわけではないのだらうけど、私はウツと目を白黒させたまま虚脱のてい、エツちゃんは私の肩にグイと手をかけて摑

み起して、

「オイ、死のう。死んでくれ」

「いや」

「もう、いけねえ、そうは言わせねえから」

私はいきなり軽々と掴みあげられ、担がれてしまった。私はやにわに失神状態で、何の抵抗もなくヒョイと肩へ乗せられてしまったが、首ったまにかじりつくくと、何だかわけの分らないような一念が起って、

「いいの、私は悲鳴をあげるから、人殺しツて叫ぶから、それでもいいの」

雨戸を押しひろげるためにガタガタやるうち片手を長押にかけて、

「我を通すのは卑怯じゃないの。私は死ぬことは嫌いよ。そんな強要できて？　死にたかったら、なぜ、一人で死なないの」

エツちゃんは、やがて蒸気のような呻き声をたてて、私を雨戸の旁へ降して、庭下駄はいて外の闇へ歩き去った。私は声をかけなかった。

私は眠るときでも電燈を消すことのできない生れつきであった。戦争中でも豆電球をつけなければ眠られぬた

ちで、私は戦争で最も嫌いなのは暗闇であつた。光が失われると、何も見えないからイヤだ。夜中に目がさめて電燈が消えていると、死んだのか、と慌てる始末であつた。私はつまり並外れて死ぬことを怖がるたちなのだろう。

五分ぐらいすぎて、私は次第に怖しくなつた。外には何の気配もなかつた。ノブ子さんの部屋へ行くと二人はまだ眠らずにいたが、事情を話してノブ子さんの布団の中でねむらせてもらうことにした。

「じゃア関取はまだ戻らないんですね」

「ええ」

「自殺でもしたのかな」

「どうだか」

「うむ、どうでもいいさ」

田代さんはノブ子さんを相手に持参のウイスキーを飲みはじめたが、私は先に眠ってしまった。痺しびれるように、すぐ眠った。

夏がきて、私たちは海岸の街道筋の高台の旅館で暮した。借りた離れは湯殿もついて五間の独立した一棟ひとむねで、

久須美と田代さんは殆どここから東京へ通い、私とノブ子さんは昼は海水浴をたのしんだ。

私は毎日七時半ごろ目がさめる。食事して、久須美を送りだすのが九時ごろ、それから寝ころんで雑誌を三四頁よむうちに眠くなり、うとうととして十一時か十一時半ごろ目がさめる。昼の食慾は殆どない。ときどき、無性にアイスクリームが欲しい、サイダーが欲しい、冷めたコーヒーが欲しい。うたたねの夢にそれを見ていることもある。中食後海へ行き四時ごろ帰ってきて風呂に入り、ついでに洗濯物をしたり、それから寝ころんで雑誌

をよみだすと、また、うとうととねむってしまふ。久須美が帰ってきて、その気配でたいがい目がさめる。夕方になっっている。海がたそがれ、暮れようとしている。私は海をしばらく見ている。久須美が電燈をつけると、もうちょっと、あかりをつけないうで、と言う。しばらくして、もうつけていいわ、と言う。私は顔を洗い、からだをふき、お化粧を直し、着物を着かえて、食卓に向う。あかるい灯と、食卓いっぱいの御馳走が私の心を安心させ、ふるさとへ帰ったような落着きを与えてくれる。私はオチヨウシを執りあげて久須美にさし、田代さんにさ

す。私は私がたべるよりも、人々がたべ、又、私が話すよりも、人々の話のはずむのがたのしい。

私はこのごろ時々よけいなことを喋るのでイヤになることがある。物を貰ったりすると、ありがとうございます、す、などと言ったりする。以前はニツコリするだけだった。季節に珍しい物を貰うと、今ごろ珍しいわね、などと自然に喋っていたり、それだけなら私は別に喋るのがイヤではないけれども、好ましくないものを貰うと、ありがとう、と言うけれども、そしてニツコリしているけれども、ずいぶん冷淡な声なのである。私の母は嬉しい

ものを貰うと大喜びをするけれども、無関心ないただき物には、ソツポを向くような調子であつた。子供心にそれが下品に卑しく見えて、母の無智無教養ということを呪っていた。以前の私はいつもニツコリ笑うだけだからよかつたけれども、近ごろは有難うなぞと余計なことを自然に言うようになったから、ありがとうございます、と言つたり、ありがとう、と言つたり、言葉や声に自然の区別があつて無ければ余程マシなような冷淡な声をだしたりするから、ふと母の物慾、その厭らしさを思いだしてゾツとするのだ。

私は自分で好きなものを見立てて買い物をするよりも、好きな人が私の柄がらにあうものを見立てて買ってきてくれるのが好きだった。一緒に買い物にでて、あれにしようか、これにしようか、一々私に相談されるのはイヤ、自分でこれときめて、押しつけてくれる方がうれしい。着物や装身具や所持品は私の世界だから、私自身が自分で選ぶと自分の限定をはみだすことができないけれども、人が見立ててくれると新しい発見、創造があり、私は新鮮な、私の思いもよらない私の趣味を発見して、新しい自分の世界が又一つ生れたように嬉しくなる。

久須美はそういう私の気質を知っていた。彼の買物の選択はすぐれていて、その選択の相談相手は田代さんであつた。私は私の洋服まで、私が柄や型を選ぶよりも、久須美にしてもらう方が好ましい。洋装店にからだの寸法がひかえてあるから、思いがけない衣裳がとどいて、私はうっとりしてしまう。田代さんやノブ子さんのいる前ですら、私は歓声をあげて自然に久須美にとびついてしまう。

私は朝目がさめて久須美を送りだすまでの衣裳と、昼の衣裳と、夜の衣裳と、外出しなくとも、いつも衣裳を

かえなければ生きてきた気持ちになれなかった。うとうとと昼寝の時でも気に入りの衣裳をつけていなければ安心していられなかった。美しい靴を買ってもらうと、それをはいて歩きたいばかりに、雨の降る日でも我慢ができずに一廻り散歩にでかけずにいられなくなる。まして衣裳類はむろんのこと、帽子でもハンドバッグ一つでも、その都度いちいち私は意味もなく街を歩いてくるのであった。映画や芝居の見物よりも私にとって最もうれしい外出はその散策で、私は満足した衣裳を身にまとうとき、何より生きがいを感じる事ができた。

私はその生きがいを与えてくれる久須美に対してどのような感謝を表現したらいいか、そのことで最も心を悩ました。私の浮気もいわば私の衣裳のよろこびと同じ性質のもので、だから私が浮気について心を悩ますのは帽子や衣裳や靴と違って先方に意志や執念があることであり、浮気自体にうしろめたさを覚えたことはなかったが、私はこの浜で、大学生やヨタモノみたいな人や闇屋渡世の紳士やその他お茶によべれたり散歩やダンスに誘われたが、私はいつも首を横にふって断った。そのとき私はそんなことをしては久須美に悪いと考えた。そして浮気

をしがないのが、久須美に対する感謝の一つの表現だと考えた。その考えはなんとなく世帯じみたようでイヤであった。私は母に義理人情を言われるたびに不快と反抗を感じ、母の無智を憎んだけれども、私もおのずから世帯じみて自然のうちに義理人情の人形みたいに動くようになっていくのが不快であり、私は又、母の姿を見出して時々苦しかった。

私は然し浮気は退屈千万なものだということを知っていた。然し、退屈というものが、相当に魅力あるものであり、人生はたかがそれぐらいのものだとも思っていた。

私は久須美が痩せているくせに肩幅がひろくその骨が
ひどくガツシリしており肋骨が一つ一つハツキリ段々に
なっている、腰の骨がとびだし、お尻の肉が握り拳ぐら
いに小さく、膝の骨だけとびだして股の肉がそがれたよ
うに細くすぼまり脛はよぎには全くふくらみというものが失わ
れてガサガサした棒になっている、その六尺の長い骨格
を上から下、下から上、そんなものをぼんやり眺めてい
ても、私は一日、飽かずくらしめていられる。時にはそれ
が人体であり肋骨の段々であることも忘れて、楽器と遊
ぶように指先で骨と凹へこみをつついたり撫でたり遊んでい

る。私は又、ねころびながら小さな鏡に私の顔をうつして眺めて、歯や舌や喉や、肩やお乳など眺めていても、一日を暮すことができる。私は退屈というものが、いわば一つのなつかしい景色に見える。箱根の山、蘆あしの湖こ、乙女峠おとめとうげ、いったい景色は美しいものだろうか。もし景色が美しければ、私には、それは退屈が美しいのだ、と思われる。私の心の中には景色をうつす美しい湖、退屈という湖があり、退屈という山があり、退屈という森林があり、乙女峠に立つときには乙女峠という景色で、蘆の湖を見るときは蘆の湖の姿で、私は私の心の退屈を仮

の景色にうつしだして見つめているように思いつく。

「私の可愛いオジイサン、サンタクロース」

私は久須美の白髪をいじりいたわりつつ、そういう。

然し、又、

「私の可愛い子供、可愛いアイスクリーム、可愛いチツちやな白い靴」

久須美は疲れてグツスリねむった。しかし五六時間で目がさめて、起きてぼんやり私の寝顔を眺めており、夜がしらじら明けると、雨戸をあけて、海を眺めている。私は然し、どうしてこんなに眠ることができるとのたろう。

いつでも、いくらでも、私は殆ど無限に眠ることができ
るような気がした。ふと目をさます。久須美が起きて私
をぼんやり見つめている。私は無意識に腕を差しだして
ニツコリ笑う。久須美は呆れたように、然し目をいくら
か輝かせて、静かに一つ、うなずく。

「何を考えているの？」

彼は答える代りに、私の額や眼蓋まぶたのふちの汗をふいて
くれたり、時には襟へ布団をかぶせてくれたり、ただ黙
って私を見つめていたりした。

私がノブ子さん田代さんに迎えられエツちゃんとは別れ

て温泉から帰ってきたとき、私は汽車の中で発熱して、東京へ戻ると数日寝ついてしまった。見舞いにきた登美子さんはあなたの中からだは魔法的ね、言訳に苦しむ時には都合よく熱まででるように、九度八分ぐらいの熱まで調節できるんだからな、天性の妖婦なのね、などと私の枕元でズケズケ言うのだが、私は言訳に苦しむ気持などは至って乏しくて、第一私は言訳に苦しむよりも病氣の方がもっと嫌いなもの、誰が調節して九度八分の熱をだすものですか。然し、私が熱のあいまにふと目ざめると、いつも久須美が枕元に、私の氷嚢をとりかえてく

れたり、汗をふいてくれたり、私は深い安堵、それは言訳を逃れた安堵ではなくて心の奥の孤独の鬼と闘い私をまもってくれる力を見出すことの安堵、私が無言で私の二つの腕を差しのばすと、彼はコックリうなずいて、苦しくないか？ 彼の目には特別の光も感情も何一つきわだつものの翳もないのに、どうして私の心にふかく溶けるように沁みてくるのだろうか。私が彼の手を握って、ごめんね、と言うと、彼の目はやっぱり特別の翳の動きは見られないのに、私はただ大きな安堵、生きているというそのこと自体の自覚のようなひろびろとした落着き

に酔い痴れることができた。

そのくせ彼はこの海岸の旅館へきて、急に思いついたように、

「墨田川が好きで忘れられないなら、私が結婚させてあげる。相当のお金もつけてあげるよ」

「そんなことを、なぜ言うの」

「好きじゃないのか？」

「好きじゃない。もう、きらい」

「もう嫌いというのが、わからないな」

「ほんとです。もう苦しめないで。私は浮気なんか、全

然たのしくないのです」

「だがな、私のような年寄が。私なら、君のように言うことができる。然し君のような若い娘がそんなふうに言うことを私は信じてはいけないと思うのだよ。私は君が本当に好きだから、私は君の幸福を祈らずにいられない。私のようなものに束縛される君が可哀そうになるのだよ」

「あなたの仰有ることの方が私にはわからないわ。好きだから、ほかの人と結婚しろなんて、嘘でしょう。ほんとは私がうるさくなつたのでしよう」

「そうじゃない。いつか君が病気になったことがあった。君は気がつかなかったが、君は眠ると寝汗をかく、そのうちに、目のふちに薄い隈がかかってきたが、ねむるとハッキリするけれども目をひらくと分らなくなるので、君は気がつかなかったんだな。いくらか目のふちがむくんでもいた。その寝顔を眺めながら、私はそのとき心の中でもう肺病と即断したものだから、君が病み衰えて痩せ細って息をひきとる姿を思い描いて、それを見るぐらいなら私が先に死にたいと考え耽っていたものだった。私自身はもう私の死をさのみ怖れてはいない。それ

はもう身近かに迫っていることでもあるから、私は死をひとつの散歩と思うぐらい、かなり親しい友達にすらなっているのだ。然し、君は違う。私のような年配になると、人間世界を若さの世界、年寄の世界、二つにハッキリ区別する年齢的な思想が生れる。私自身若かったころは殆どもう若々しいところがなくて孤独癖、ときには厭人癖、まことにひねこびた生き方をしており、私に限らずなべて若者の世界も心中概ね暗澹たるもののように察しているが、私は然しある年齢の本能によって限りなく若さをなつかしむ。慈しむ。若さは幸福でなければなら

ないと思う。若者は死んではならぬ。ただ若さというものに対してすでにそのような本能をもつ私が、私の最愛の若い娘に対して、どのような祈りをもっているか、その人の幸福のために私自身の幸福をきり放して考えることが微塵も不自然でないか……」

久須美は私のために妻も娘も息子もすてたようなものだった。なぜなら彼は、もはや自宅ではなしに私たちの海岸の旅館へ泊りそこから東京へ通っているのだから。人々はそのような私たちをどんな風に言うだろうか？ 私
が久須美をだましましたと言うだろうか。恋に盲めしいた年寄の

あさましい執念狂気を思い描くことだろう。

私は然しそんなことはなんとも思っていない。息子や娘にとって、親なんか、なんでもないではないか。そして親が恋をしたって、それはやむを得ぬこと、なんでもないことだと私は思う。久須美もそんなことは気にしていなかった。私は知っている。彼は恋に盲いる先に孤独に盲いている。だから恋に盲いることなど、できやしな。彼は年若い涙腺までネジがゆるんで、よく涙をこぼす。笑っても涙をこぼす。然し彼がある感動によって涙をこぼすとき、彼は私のためになしに、人間の定めのため

めに涙をこぼす。彼のような魂の孤独な人は人生を観念の上で見えており、自分の今いる現実すらも、観念的にしか把握できず、私を愛しながらも、私をでなく、何か最愛の女、そういう観念を立てて、それから私を現実をとらえているようなものであった。

私はだから知っている。彼の魂は孤独だから、彼の魂は冷酷なのだ。彼はもし私よりも可愛い愛人ができれば、私を冷めたく忘れるだろう。そういう魂は、然し、人を冷めたく見放す先に、自分が見放されているもので、彼は地獄の罰を受けている、ただ彼は地獄を憎まず、地

獄を愛しているから、彼は私の幸福のために、私を人と結婚させ、自分が孤独に立去ることをそれもよかろう元々人間はそんなものだというぐらいに考えられる鬼であつた。

然し別にも一つの理由がある筈であつた。彼ほど孤独で冷めたく我人ともに突放している人間でも、私に逃げられることが不安なのだ。そして私が他日私の意志で逃げることを怖れるあまり、それぐらいなら自分の意志で私を逃がした方が満足していられると考える。鬼は自分勝手、わがまま千万、途方もない甘ちゃんだった。そし

てそんなことができるのも、彼は私を現実をほんとに愛しているのじゃなくて、彼の観念の生活の中の私はていのよいオモチヤの一つであるにすぎないせいでもあった。

田代さんはこの旅館へきてノブ子さんと襖を距てて生活して、いまだに目的を達することができずにいた。田代さんは三日目ぐらいに自宅へ泊る習慣で、その翌日は、きのうは私の奥さんを可愛がってやってきました、などとことさら吹聴したが、田代さんの通人哲学、浮気哲学はヒビがはいつているようだ。田代さんは人間通で男女

道、金銭道、慾望道の大達人の如くだけれども、田代さんはこれまで芸者だの商売女ばかりを相手にして娘などは知らないのだから、私みたいな性本来モーローたるオメカケ型の女でもなければ自分の方から身をまかせるように持ちかける女などはめったにないことを御存知なのだ。女はどんな好きな人にでも、からだだけは厭だと言う、厭ではなくても厭だと言う、身をまかせたくて仕方がなくとも厭だと言って無理にされると抵抗するよ
うな本能があり、私でもやっぱり同じ本能があつて、私は然しそれを意識的に抑えたただけのことで、私はそんな

本能はつまらないものだと思っている。女は恋人に暴行されたいのだ。男はその契りのはじめに於て暴行によつて愛人のからだに感謝を受けるといふこと、田代さんは相談ずくの商売女しか御存知ないから、それに田代さんは通人、いわゆる花柳地型の粹人だから、ずいぶん浮気性だけれども、愛人が厭だと言ひ抵抗するのを暴行強姦するなんてそんなことはやるべからざる外道だと思つてゐる。そして十年一日の如くノブ子さんを口説きつづけているのだけれども、たぶん暴行によらない限り二人の恋路はどうすることもできないのだらう。私

はバカバカしいから教えてあげない。そして時々ふきだしそうになるけれども、田代さんはシンミリして、

「いったいノブちゃん、君は肉体的な欲求というものを感しないのかなア。二十にもなって、バカバカしいじゃないか」

そしてムツツリ沈黙しているノブ子さんを内心は聖処女ぐらいに尊敬し、そしてともかくノブ子さんの精神的尊敬を得ていることを内心得意に満足していた。

けれどもノブ子さんは肉体的欲求などは事実において少いのだから、別なことで苦しんでいる様子であったが、

それは嘗々と働いて、自分の生活はきりつめて儉約しながら、人のために損をする、それを金々々、金銭の奴隷のようなことを言う田代さんが、いいのだよノブちゃん、それでいいのだ、と言う。しかし実際それでいいのか、自分の生活をきりつめてまでの所得を浪費して、そして人を助けて果して善行というのだろうか、疑ぐっているのであった。

ノブ子さんはともかく田代さんや私たちがついているから損をしても平気だけれども、独立したら、こんな風でやって行けるかと考えて苦しんでいるので、実行派の

ガツチリ家、現実家だから、その懊悩は真剣であった。

「女が自分で商売するなんて、サチ子さん、まちがって
るんじゃないかしら。私、このまま商売をつづけて行く
と、人に親切なんかできなくなつて、金銭の悪魔になる
わよ。そうしなきゃ、やって行けないわよ」

「そうね」

私は生返事しかできないのである。ノブ子さんの懊悩
は真剣で、実際その懊悩通りに金銭の悪鬼になりかねな
いところがあつたが、私は然しノブ子さんその人でなし
に、その人の陰にいる田代さんのガツチリズムの現実家、

ころんでもタダは起きないくせに、実は底ぬけの甘さ加減がおかしくて仕方がないのだ。人生はままならねエもんだなア、と田代さんは言うけれども、私もそれは同感だけれども、田代さんが感じる如くにままならねエかどうか、田代さんは人間はみんな浮気の虫、金銭の虫、我利の虫だと言いきるくせに、その実ノブ子さんを内々は聖処女、我利我利ズムのあべこべの珍しい気象の娘だなどと、なんて又ツジツマの合わない甘ったれた人なんだか、私はハリアイがぬけてしまう。

私は野たれ死をするだろうと考える。まぬかれがたい

宿命のように考える。私は戦災のあとの国民学校の避難所風景を考え、あんな風な汚ならしい赤鬼青鬼のゴチャゴチャしたなかで野たれ死ぬなら、あれが死に場所というのなら、私はあそこでいつか野たれ死をしてもいい。私がムシロにくるまって死にかけているとき青鬼赤鬼が夜這いにきて鬼にだかれて死ぬかも知れない。私は然し、人の誰もいないところ、曠野、くらやみの焼跡みたいなところ、人ツ子一人いない深夜に細々と死ぬのだったら、いったい、どうしたらいいだろうか、私はとてもその寂寥せきりょうには堪えられないのだ。私は青鬼赤鬼とでも一緒に

いたい、どんな時にでも鬼でも化け物でも男でさえあれば誰でも私は勢いっばい媚びて、そして私は媚びながら死にたい。

わがままいっばい、人々が米もたべられずオカユもたべられず、豆だの雑穀を細々たべているとき、私は鶏もチーズもカステラも食べあきて、二万円三万円の夜服をつくってもらって、然し私がモーローと、ふと思うことが、ただ死、野たれ死、私はほんとに、ただそれだけしか考えないようなものだった。

私は虫の音や尺八は嫌いだ。あんな音をきくと私はね

むれなくなり、ガチャガチャうるさいトロツトなどのジヤズバンドの陰なら私は安心してねむくなるたちであった。

「まだ眠むっちゃ、いや」

「なぜ」

「私が、まだ、ねむれないのですもの」

久須美は我慢して、起きあがる。もうこらえ性がなくて、横になると眠るから、起きて坐って私の顔を見ていくけれども、やがて、コクリコクリやりだす。私は腕をのばして彼の膝をゆさぶる。びっくりして目をさます。

そして私がニツコリ下から彼を見上げて笑っているのを見出す。

私は彼がうたたねを乱される苦しきよりも、そのとき見出す私のニツコリした顔が彼の心を充たしていることを知っている。

「まだ、ねむれないのか」

私は頷く。

「私はどれぐらいウトウトしたのかな」

「二十分ぐらい」

「二十分か。二分かと思ったがなア。君は何を考えてい

たね」

「何も考えていない」

「何か考えたろう」

「ただ見ていた」

「何を」

「あなたを」

彼は再びコクリコクリやりだす。私はそれをただ見ている。彼はいつ目覚めても私のニツコリ笑っている顔だけしか見ることができないだろう。なぜなら、私はただニツコリ笑いながら、彼を見つめているだけなのだから。

このまま、どこへでも、行くがいい。私は知らない。地獄へでも。私の男がやがて赤鬼青鬼でも、私はやっぱり媚をふくめていつもニツコリその顔を見つめているだけだろう。私はだんだん考えることがなくなっていく、頭がカラになって行く、ただ見つめ、媚をふくめてニツコリ見つめている、私はそれすらも意識することが少なくなって行く。

「秋になったら、旅行しよう」

「ええ」

「どこへ行く？」

「どこへでも」

「たよりない返事だな」

「知らないのですもの。びっくりするところへつれて行ってね」

彼は頷く。そして又コクリコクリやりだす。

私は谷川で青鬼の虎の皮のフンドシを洗っている。私はフンドシを干すのを忘れて、谷川のふちで眠ってしまった。青鬼が私をゆさぶる。私は目をさましてニツコリする。カッコウだのホトトギスだの山鳩がないている。私

はそんなものよりも青鬼の調子外れの胴間声が好きだ。
私はニツコリして彼に腕をさしだすだろう。すべてが、
なんて退屈だろう。然し、なぜ、こんなに、なつかしい
のだろう。

日本文学電子図書館

白痴

著者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店
昭和44年1月30日 13刷



日本文学電子図書館